
夜空に浮かぶ

幾崎炉工

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜空に浮かぶ

【Nコード】

N5300T

【作者名】

幾崎炉工

【あらすじ】

夜空は深く、僕を飲む。

望遠鏡から覗く夜空は懐かしかったけれど、虚ろな色がどうにも耐えられず、僕は目を伏せた。伏せたところで待っていたのは大して差のない暗闇だったけれど、比べるまでもなかった。

「ねえ、まだ？」

後ろの方で声がした。僕はレンズから目を離して眼鏡をかける。中腰の姿勢を起こしながら振り返れば、腰がずきりと鈍く痛んだ。日頃の運動不足を嘆きつつ、「もうちょっと待ってください」と言うのと、先輩は不服そうに鼻を鳴らした。その手には水筒のカップが握られていて、おそらく中身は僕が持ってきたコーヒーだろう。それを口につけると同時に先輩は顔をしかめた。僕はいつもコーヒーをブラックで飲む。今日もそれを入れていきますからと言ったのだが、もしかして忘れていたのだろうか。思い出したようにミルクとシュガーを入れているあたり、うっかりしていただけたかもしれない。僕が薄く笑ったのに気づいてかこちらをにらんできたので、気づかなかったように戻り、今度は肉眼で夜空を見上げた。

暗く、深い。そうとしか言うことのできない僕は、きつと感受性も語彙も欠けているのだろう。考えたところでそれ以外の言葉も、それ以下の言葉までも見つからなかった。つまり明白な事実ということだ。とはいえ言葉に優劣をつけることのできる人間でもないのだ、結局は無駄な思考だ、とため息を吐く。すると、口を覆っていたマフラーのせいだろうか、眼鏡が曇り、視界が真っ白になった。マフラーを取るか眼鏡を取るか。どちらが正しい判断なのだろうか。そんな風に、また無駄に思考した。

やはり人間にとって視界とは自分の位置を知るために大変重要なものなので、僕は暖かさを捨ててマフラーを下げた。徐々に視界が開ける。現れたのは対照的な真っ黒で深い夜空。気づかなかったが、随分と長く見続けていたようだ。驚いて、あわてて顔を伏せた。

なにもかもを飲み込むようなその黒は、僕の中で海とイコールで結ばれる。それが幼いころの出来事以来苦手だった。家族と行った海水浴で、僕は溺れてしまったのだ。それも、随分と深いところで偶然ライフセイバーの人が近くにいなかったならば、今頃僕はここにいないだろう。そのときに見えた――いや、見えなかった海の底を、夜空を見上げるたび思い出して、心臓だけが吸い込まれていく感覚に陥るのは、それから十数年経った今でも続いている。

夜空は覆うものではなく、飲み込むもの。

いつも思っていた。ついっつかり見上げた時になどには、より強く。

たちの悪いことに空はどこにでもあった。海は海に行かなければ、山は山に行かなければならないが、空はどこにでもあるのだ。どれだけ努めていても見ずにはいられず、視界の端に入ってしまう。あまりに高い遭遇率から余計に危機意識が強くなって、かえって慣れることができなかった。

「ねえ、まあだ？」

その声にはつとして、今度は振り返らずに、「もうすぐです」と少し強めの語調で返した。唸るような声を後ろから聞きながら止めていた手をせっせと動かし、その準備をすぐに完了させた。

「もういいですよ」

言いながら歩み寄ると、先輩は僕に向けてカップを差し出した。

それは先ほど先輩が使っていたものではなく、僕が自分用として持ってきたものだ。「お疲れ様」とだけ言って数秒後、ずいっと突き放すようにそれを差し出した。僕が受け取らないからだろうか。いっぱい注がれたそれは、激しく波を立てて少しこぼれた。先輩のこただ、このままでは全て僕にぶちまけるかもしれない。

「あり、が、とう。ございます」

そんな風に言葉を切って礼を言う。早々に受け取るべきと思いながらも、おずおずと手を出した。こぼさないよう注意しながら受け取ると、先輩は誇らしげな顔をして、「君にはいつも迷惑をかけて

いるからね」と言った。普段の先輩からはとてもではないが考えられない。だからかなのか僕は。

「……ありがとうございます」

もう一度繰り返した。「変な奴だね、君は」と先輩はおかしそうに笑う。僕もそれに笑みを返し、立ち上る湯気を見つめた。先輩が淹れてくれたコーヒー。たった二度の感謝の言葉だけでは感謝しきれない。といっても先輩がしてくれたのは水筒からカップに注いだだけだ。もしも本当に、覚えているのなら。思いながら、一滴もこぼれないよう細心の注意を払って口につける。

「あんな苦いもの、飲めたものじゃなかったからね。感謝してよ、ミルクもシュガーも、たっぷり入れてあげたからさ」

忘れていたようだった。

「うーん、いないねえ」

そう言って先輩はレンズから目を離して何度も首をかしげた。その仕草が可愛らしく、眺めているだけで今までの苦勞が吹き飛んでしまう。わずかしき湯気を立てなくなったコーヒーを口に含むと、甘ったるさが口いっぱいに広がり、脳をも侵略されそうだった。捨ててしまいたくもあつたけれど、あの先輩が僕のために淹れてくれたコーヒーだ。とてもではないがそんなことできない。だから何度でも顔をしかめるし、嫌いな味でも味わおうとする。それが感謝というものだろう。

「ねえ、探すの手伝ってよ」

不意に、振り返った先輩に呼びかけられた。そのときはちょうど、意を決してカップに残った最後の一滴を飲み干したところだったので、僕の顔はきつと達成感や満足感、そしてそれを残念に思う感情が入り混じった表情だったのだろう。

「どうしたの？」

怪訝そうな顔で問いかけられ、「いえ、なんでも」と返した。そのころには元の表情に戻せていただろうか。それ以上は追及されな

かった。「それで、僕になにか用ですか？」

「あ、うん」

「探すの手伝ってくれないかな」と言つて、先輩は夜空を指差す。なるべく空は見ないようにしながら、先輩の指先を見つめ、「どの星ですか？」と訊きかえした。

「そこに図鑑がありますから、それを見れば」

すると先輩はきよとした表情になって小首をかしげた。その仕草の意味が分からずに、「変なこと訊きましたか？」と僕はまた訊ねる。

「星なんて見ないよ」

「え？」

曲がり角のちょうど死角から現れた人とぶつかりそうになったよ
うな、思いもかけないその言葉は、僕の思考を遮断した。意味がわ
からない。ありきたりの質問しか浮かばない。

「じゃあ一体なにを――」

「未確認飛行物体に決まつてるでしょ」と、僕の言葉をさえぎる形
で、先輩は答えた。決まつてなどいない。僕はかぶりを振るが、先
輩は相変わらず「どうしたの」と言うだけなので、僕もまたかぶり
を振った。そのせいで頭がくらくらしてくるくらいに。

「どうしたもこうしたも……僕は先輩が星を見たいっていうから、
こうしてわざわざ望遠鏡を持ってきたのに、あの言葉は嘘だったん
ですか？」

「認識の違いさ。君は『ホシ』と聴いて夜空に浮かぶ『あれ』を想
像したんだろうけど、残念だったね。私は刑事的な意味で『ホシ』
と言ったのさ」

「そんな言葉は聞きたくないです」

意味も知らないくせにこの人は、と頭を抱えこんでしまいたくな
る。たかがUFOを見るために、僕は車で数時間かかる実家まで望
遠鏡を取りに帰ったのかと思うと、今日はとてつもなく無駄な一日
を過ごした気がした。こんなことももう何度目だろうか。いつのま

に僕の中で、これがいつものことになってしまったのだろう。だから、もはやこれは気ではなく確信だ。

「ていうか、UFOくらいなら肉眼でも見えるじゃないですか。どうしてわざわざ望遠鏡を？」

「そんな、偶然それに出くわした一般人みたいな観察って、だって嫌でしょう？」

「つまり、本当に星が好きな人は、肉眼ではなくて望遠鏡で見るだろうってことですよネ？」

「そう」

言って先輩はまたUFO探しにまた挑み始めてしまった。僕は絶対に、先に肉眼で探してから望遠鏡で詳しく見ればいい、などと助言しないことを誓う。空っぽのままだったカップにコーヒーを注ぎ、眼前に持つていくと、盛んに立ち上る湯気が僕の顔を包んだ。乾燥した肌には心地よい。香りを存分に楽しんでから口内へと注ぐ。ああ、この苦さが懐かしい。

横目でちらりと先輩をうかがうが、まだ諦めないらしく、望遠鏡をあちこちの方向へと向けてUFOを探していた。眉尻を下げた表情から、困惑しているのは明瞭だ。助けてあげたいと思いはするものの、空を見上げては一分も耐えられずに顔を伏せる。そんなことを何度繰り返したときだったか、気づけば先輩が僕を見ていた。がつちりと視線が合っている。

「どうしたの？ さっきから」

まるで無理してるみたいだ。そう先輩は言って、柄にもなく僕のことを心配しているような目を見た。思わず目が泳ぐ。どこを見ても先輩の目が視界の端に、ちらつく。

「なんでも、ないですよ」

いよいよ逃げ場がなくなったので、とうとう僕は夜空を見上げた。そこにしか逃げ道はない。自分に賭けた。どうにかして耐えろ、と強く言い聞かせて。これまでに何度も何度も繰り返した言葉を、また。まぶたをしっかり開いて、あの真っ暗なものを受け入れる。

——フラッシュバック。

よみがえるのは冷たい海。自分のものじゃないような四肢。からみつくようにうねる流れ。遠くなる光。置いて行かれる思考。ゆっくり、ゆっくりと、つま先から黒く染まる。じわじわ、じわじわ、なぶるように僕は染められていく。ぼんやりと見える無。死の向こう側。その扉に手をかけて、僕は――。

先輩とまた、目が合った。

「……なにか、隠してるでしょ」

先輩は言う。けれど僕は頑なに、「なにも隠してなんかいませんよ」と答えることしかできない。動悸が激しい。この事実くらいは別段隠すようなことでもないのだ。むしろ自己紹介のときにも言えるくらいのことなのだ。自分の個性とも取れる。なのに、それなのにどうしてか、先輩には言いたくない。

自分でもなぜかわからない。

「……隠しててすみませんでした。風邪を引いてるみたいです。だからなのか、ちょっと立ちくらみがひどくて」

そんな風に先輩に嘘をつくのは、初めてだった。

「ちょっと休んできます」と言つて、先輩がなにか言おうとしているのに気づいていながら、それをさせまいと毛布を体に巻きつけ、ごろんと横になった。無論のこと仰向けにはならない。たとえばぶたを閉じていようと、その向こうにあればあると思うと、今見ている暗闇でさえ、あの色に染まってしまふのだ。それが上にあるのか前にあるのか。僕にとっては大きすぎる問題だった。

今の僕にできる最善の行為は、先輩になにを言われても寝たふりをしてやり過ごすことだ。それしかない。先輩のことよりも自分のことを優先し始める思考が嫌になった。そうでもないと避けられそうにもなくて、逆に声もかけてほしくて。けれど、絶対に反応は取らないと自分の中で強く決心した。

「ねえ」

だけど、

「ほら」

その声が聞こえ、

「おいでよ」

手をとられた。

まぶたは閉じたまま、その手に引かれるがまま、僕は立ち上がる。巻きつけていた毛布がばさりと落ちる音が、どこか遠くの方から聞こえた、気がした。歩きながら足元に気を配る余裕もないくらい自分の意志の弱さに呆れながら、触れた先輩の手がやけに冷たいことが気になって仕方がなかった。人は緊張すると手が冷たくなると聞いたことがある。ということは、先輩はこの状況に緊張ではないにしろ、なんらかのマイナス的な感情を抱いているのではないか。先ほどまで暖かくしていた先輩の手の冷たさは、そうでもないか。説明のしようがない。もちろんこれは独断にも近い私見や偏見ではあるけれど、もしかしたら僕は、とんでもないことをしてしまったのではないか。

僕らの関係にかかわるなにか重大な――。

がくん、と体が前につんのめる衝撃に思わず立ち止まる。先輩の足音がほんの少し近づいて、眼鏡の鼻あての感覚がなくなった。先輩の呼吸に鼻先をくすぐられるような気がした。僕の頭の上に手が乗る。先輩の手。ゆっくりと、力がかかる。

僕は前かがみになっていた。いつかの姿勢。これは……そうだ。望遠鏡を覗いたときのものだ。眼鏡を取られたことから、僕の予想は確実だろう。ならば、この先に僕を待ち受けているのは、きっと。

言われたとおり目を開けようとして……僕はためらった。ここで目を開ければ、目の前にはあの途方もない闇が広がっている。間違いない。そして僕はまた『あの』闇を見るのだ。幼いころ見た――今までずっと見続けている――海の底を。死も無も孕んだなにものかと、まるで違わぬものを。わかっている。ある程度は耐えられる。けれど長時間は持たない。だから――。

先輩に知られてしまう。

知られたところでなにもない。そんな思考はもはやできなかった。なぜなら僕は先輩に、何度も嘘をついてきたからだ。僕を気遣う心から出た言葉に偽りを返してしまった。その厚意をないがしろにした僕の行為は、どうしようもないほど感謝とはほど遠く、裏切りとさえいえる。

僕は先輩を、裏切ったのだ。

否定のしようのない事実は、極限まで冷やされたナイフとなって僕の胸を貫いた。胸を中心にじわじわと凍りついていく。あの暗闇のように、じわじわと。引き抜こうとしてもかなわない。刃の柄を持つているのはほかならぬ僕で、力強く握った片手で押し込んでいく。もう一方の手で引き抜こうとつかむけれど、その手もまた同じように押し込み、余計に悪化する。力があっても手段がなければ意味をもたないように、思いはしてもやろうとしなければ意味はないのだ。つまり、この状況を僕は無意識に受け入れようとしている。刻一あのとき見えなかったなにかを、今ここで見ようとしている。刻一刻、ずぶずぶと吸い込まれるように、切っ先は本当の最奥へと迫っていく。

どちらにしたところで、僕はもう自分の力だけでは助かりようがなかった。当たり前で、自業自得だ。それをどこかで望んでいるのだから。これを受け入れることが先輩へのせめてもの感謝や、謝罪に当てはまる。無意識ではないところでも、そう思い始めた。甘んじて受け入れよう。そのあとがどうなるかはわからないけれど、知ったことじゃない。あのときと同じ、今までと同じことの繰り返しだ。この選択が間違いであろうとも、そんなことはどうでもいい。緩慢に上体を起こすと、片手に締め付けられるような感触が走った。ナイフをつかむ手に添えられたような気がして、驚いてまぶたを開けてそちらを見ると、先輩が立っていた。俯いていて、艶のある長い髪が表情を隠している。なんてことだ。僕は先輩と手を繋いでいることをすっかり忘れてしまっていた。それほど先輩の力は、

握り返さなければわからないくらいに弱々しい。初めから自分の体の一部であるかのような違和感のなさを僕に与えていた。そのせいで。

そのときだった。

先輩の長い髪の間から、一粒の滴が垂れた。ぽつり、ぽつり、地面に染みを作っては吸い込まれていく。僕はその光景をなにも言わずに眺めていた。言えなかったのではなく、言わなかった。どのように先輩に声をかけるべきくらい、いくら僕でもわかる。けれど、現在進行形で嫌な方へと進んでいる中、果たしてその言葉は意味をなすのかどうかわからなかったのだ。

自分に嫌気がさして下唇を噛んだ。鉄の味、なんてものはしない。つまりは僕自身、それほど重大な問題だとは思っていないのだろう。そしてきつと、それは先輩のほうも同じだ。冷静になって考えるべきだ。そう、そうすればおのずと全ての原因である、僕が嘘をついた理由も明らかになる。簡単なことだ。嘘をついた理由。それは――

楽しんでいる先輩を嫌な気持ちにさせたくなかったから、じゃないか。

きゅ、と先輩の手を強く握りしめる。先輩の存在を確かめるためののか、助けを求めてなのかはわからない。先輩の軽い呻き声を聞きながら、僕は前かがみになった。張り裂けそうな心臓の音。浅く速くなる呼吸。喉に張り付く粘っこい唾。小刻みに震える手足。見開きすぎてからからに乾いた眼球。全てを感じながらもレンズだけを見て、少しずつだが距離を縮める。あと、十センチ、七、三、一。そこには、星があった。

当たり前だが星だった。望遠鏡の視界のほとんどを埋め尽くしているそれは、あの事故があるまで毎日のように見続けていた中の一つなのか、名前は思い出せないが見覚えはあった。どういうわけか夜空に身構えていた僕は拍子抜けと同時に、その美しさに驚愕した。これほどのものだったかと思わず歎息を漏らす。幼少の頃の美化さ

れているはずの記憶にも勝る美しさを、その星は有し、発しているのだ。ただの美しさでない、まるで危険性をもはらんだような美しさを。今までわだかまっていた感情全ては、歎息とともに収束され、昇華された。

どうしてこれほど美しいのか、気になって仕方がなかった。見れば見るほどに見蕩れて釘付けになる。瞬きも呼吸も忘れた。わずかに視界に入る黒でさえ気にならないほどだ。そこで僕はようやく、先輩がなぜこれを見せようとしたのかが分かった。きっと先輩は伝えたかったのだ。誰もがどこかで学ぶはずの真理のようなものを。言葉ではなく感性で、他人からではなく自分から気づかなければいけないことを。先輩は僕の拳動から夜空が苦手なことを悟ったに違いない。つまり、気づかれたわけだ。そうでもなければこれを見せようとは思わない。

すると途端に全身から力が抜けて、僕は地面にへたり込んでしまった。無駄なことばかりしていた自分に気づいて、思わず笑ってしまいそうだった。見上げると、暗い海にたくさんの光が差し込んだような夜空と、手を繋いだままの先輩の顔が見えた。先輩は当然のように泣いていて。僕の顔なんて見てもいなくて。だから、僕から声をかけなければならぬだろう。できうる限りの精一杯の笑顔を作る。それがきくと、感謝というものだ。そして、先ほどためらった、あの言葉を。

「先輩、ごめんなさい」

それから。

「ありがとうございます」

握る手が、熱くなった。

望遠鏡から覗く星は懐かしかったけれど、虚ろな夜空がどうにも耐えられず、僕は目を伏せた。先輩の手を握って、再びその目を開いたところで待っているのは同じ暗闇だったけれど、そんなもの比べるまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5300t/>

夜空に浮かぶ

2011年5月24日22時17分発行